

麻杏薏甘湯

■金匱要略

組 成	薏苡仁 10.0, 麻黄 4.0, 杏仁 3.0, 甘草 2.0
主 治	風湿在表
効 能	去風化湿

プロフィール

本方は、『金匱要略』痙湿喝病門の処方で、条文には「病者一身悉く疼み、発熱、日晡所劇しきものは風湿と名づく。この病、汗出でて風に当たるにより傷られ、或は久しく冷を取るにより傷られて致す所なり。麻黄杏仁薏苡甘草湯を与うべし」と記載されている。古人が風湿(筋肉や関節の痛みを主体とする疾病)と呼んだ証候に対する処方である。後年、山田業広や浅田宗伯が疣贅に対する応用を提示し、現在ではこの方面への応用もみられる。なお、医療用漢方製剤における各薬物の分量は上記の通りであるが、原典の分量は、麻黄半兩 甘草一兩 薏苡仁半兩 杏仁十個で、他の発汗剤に比べて麻黄の量が少ない(薏苡仁・杏仁の量も少ない)。

方 解

本方は、風湿の邪によって生じた身体疼痛、発熱などの症状を治する処方である。少量の麻黄は、腠理を開き鬱滞している風湿の邪を、わずかな汗とともに排出することを目的としている。杏仁は麻黄と共同して肺の水道通調作用を補助して湿を除き、薏苡仁は健脾去湿して湿痺を改善する。甘草は脾を補益して水湿の運化を助け、同時に麻黄による発汗過多を抑える。

四診上の特徴

矢数は本方の目標を、「冷えが原因で発熱し、諸筋肉痛、または諸関節痛を訴えるもので、急激の症より、やや緩症によく応ずる。皮膚は汗が出、あるいは浮腫があり、または乾燥して艶のないことが多い。頭にふけが多いというのも本方運用の目標の一つとなる。」と述べている¹⁾。中村は本方を用いる際には水毒、熱証、燥証を目標とし、口訣として、午後になるとのぼせ、夕方に発熱し、疼痛も増悪するとある、と述べている²⁾。

使用上の注意

一般薬として使われている麻杏薏甘湯加防己で肝障害の報告が見られる³⁾。

臨床応用

保険適応は関節痛、神経痛、筋肉痛であるが、皮膚疾患など基本に湿を有する病態にも応用されている。症例集積研究は少ない。

1. 整形外科領域(関節痛、神経痛を中心に)

青森県在住の神は、気候風土を考慮すると東北地方は麻杏薏甘湯が適応する風邪と湿邪が多い環境であるとし、坐骨神経痛、ぎっくり腰、椎間板ヘルニアなどの腰痛症に頻用すると述べている⁴⁾。大塚は氷枕により冷やしたことで生じた頭痛と、首が廻らなくなった男性に用いて著効を得ているが⁵⁾、近年では冷房のために生じた肩痛に用いた報告も見られる^{6, 7)}。

雪村らは、関節疼痛における寒冷、風湿の関与について、統計学的に検討している。通院患者のうち、関節疼痛を主訴とするものを関節群、他の愁訴を主訴とし、かつ関節痛の無いものを無痛群としたとき、寒冷被暴のあるものは、関節群では561例中361例、無痛群では137例中57例と、関節群の方が寒冷被暴の経験者が有意に多かった。また関節群のうち、麻杏薏甘湯が有効だった有効群においても、寒冷被暴の経験者は111例中79例と無痛群に比べて有意に多かった。さらに風湿においても、無痛群に比べて関節群および有効群の方が、風湿の被暴経験者が有意に多かった。以上より、関節疼痛を主訴とした麻杏薏甘湯の有効例には寒冷風湿が関与していることが確かめられたと述べている⁸⁾。

また、麻杏薏甘湯加防己の安全性と有効性を、軽度～中等度の変形性膝関節症、肩関節周囲炎、坐骨神経痛で検討した報告⁹⁾や、膝関節痛と頸部慢性筋肉痛に対する効果を見た報告もある¹⁰⁾。

徐は10例の足底筋膜炎に本方単独、もしくはヨクイニン2g併用で投与したところ、5例が有効であり、無効例3例に他剤を合方したところ、牛車腎気丸と五苓散を併用した2例で軽快したと述べている¹¹⁾。

中田はガングリオンに対する効果を報告している。それによると、いずれの症例も2～3週間の内服で治癒したと述べている¹²⁾。また喜山は、手の滑膜性腱鞘の浮腫に対し麻杏薏甘湯を用いた結果を報告している。それによると、無汗で尿不利のある11例15手(男性1例2手、女性10例13手)に対し本方を投与したところ、著効3例、有効4例、やや有効1例であった。

無効例は、元来無汗で排尿回数が増加しない症例であったと報告している¹³⁾。

2. 関節リウマチ

中村は、確定診断に至らないがRA(+)の多発性関節炎の患者に本方を投与し、症状と検査成績の改善がみられた1例を報告している²⁾。また、永井はメソトレキセートによる間質性肺炎のため内服を中止した患者に対し麻杏薏甘湯と防己黄耆湯を倍量投与して症状をコントロールしたところ、プシラミンも中止でき、少量のプレドニゾロンのみとなった1例を報告している¹⁴⁾。西森は、西洋薬との併用例を報告している¹⁵⁾。

3. 皮膚疾患

本方は、フケ症や主婦湿疹、白癬に用いるとされているが、これらに対する報告はあまり見られないし、症例集積研究も見られない。尋常性疣贅に対する報告が多く、そのほか掌蹠膿疱症、慢性湿疹、帯状疱疹後神経痛などにも応用される。

大塚は、「世俗に謂ふ所の水むしにて、数年或は十数年も癒らないものに、頭にふけの多くて困るというを標的として、麻杏薏甘湯を與へて、効を得たものが数名ある。大抵二ヶ月ばかりの服薬で全快した。また手の甲が荒れて、医師より卵巣のホルモンの欠乏が原因なりと診断された一婦人と、凍傷を患ふ一青年とに、共に頭にふけの多いのを目標に、此湯を用ひて二週間程でよくなったものがある。」と述べている¹⁶⁾。

龍野は、皮膚科疾患に用いるときには、1) 疣でやや硬く乾燥性のもの、2) 水虫で乾燥性のもの、一部がジクジクしていてもよい、3) 頭のフケ、手甲の荒れ、進行性手掌角皮症、凍傷、湿疹などで落屑状に乾燥するもの、あるいは痒みを伴うものに用いると述べている¹⁷⁾。

疣贅に対する報告は多数ある。渡邊は15例のヒトパピローマウィルスによる尋常性疣贅に対し、漢方治療を行った。このうち9例に麻杏薏甘湯を単独、もしくは他の処方と併用で用いたところ、1ヵ月から半年で治癒したと述べている¹⁸⁾。この他の症例報告でも、約1ヵ月程度の内服で消失している。緒方は31歳の女性と10歳の女兒に対して麻杏薏甘湯を投与したところ、いずれも1ヵ月で全て消失し、さらに女兒では接触性皮膚炎も軽快したと報告している¹⁹⁾。

中村は主婦湿疹と脱毛に対し本方を投与したところ、2~3日で手の感覚が改善し、1週間で亀裂は消失し、3週間で手は完全に治癒となった。4週間でフケが減少し、6週間で産毛が増え出したと報告している²⁰⁾。桜井らは、脂漏性皮膚炎(フケ症)の漢方治療を集めた報告で、荊芥連翹湯、抑肝散加陳皮半夏との合方で治癒した2例を報告している²¹⁾。この他、帯状疱疹後神経痛に用いた報告もある²²⁾。

4. その他

龍野はその他の臨床応用として、胃痛、気管支喘息、肺壞疽、

妊娠腎等で喘咳、顔面浮腫する者に用いるとしている¹⁷⁾。臨床報告としては、急性腎炎²³⁾や鼻炎²⁴⁾の報告も見られる。また、運動で発汗したのち冷えて熱発し、関節痛も伴った症例に麻杏薏甘湯を用いた織部の治療経験がある²⁵⁾。

小川は明け方や夕方に発作を起こす30例の気管支喘息に対し、本方を投与したところ全例で発作が軽快したと報告している²⁶⁾。

また、リハビリテーションの分野での使用経験もある。玉嶋らは、脳卒中後の肩、肘、手首の疼痛に²⁷⁾、上田は頸髄損傷後のリハビリ中に生じた膝痛に用いた症例を報告している²⁸⁾。

【参考文献】

- 1) 矢数道明: 臨床応用漢方処方解説 582-584 創元社 1966
- 2) 中村謙介: 多発性関節炎に麻杏薏甘湯 漢方の臨床 39(5) 634-638 1992
- 3) 阿部勝利: 最近経験した漢方薬による肝障害の二例 漢方の臨床 44(2) 231-236 1997
- 4) 神 靖衛: 私の好きな処方 麻黄杏仁薏苡甘草湯加方 漢方の臨床 35(12) 1287-1297 1988
- 5) 大塚敬節: 修琴堂治験 東洋医学 1(4) 253-264 1952
- 6) 松本一男: 東洋堂経験余話(165) 漢方の臨床 53(3) 482-484 2006
- 7) 中川良隆: 外来治験例(52) 東静漢方研究室 28(3) 23-32 2005
- 8) 雪村八一郎 ほか: 「麻杏薏甘湯」の有効例、無効例 日東医誌40(4) 282 1990
- 9) 中村哲郎 ほか: 運動器疼痛性疾患に対する麻杏薏甘湯加防己の有効性と安全性の検討 和漢医薬学雑誌 21(suppl) 101 2004
- 10) 長岡 功 ほか: 麻杏薏甘湯加防己(痛散湯)の膝関節痛と慢性筋肉痛に対する改善効果 グルコサミン研究9 31 2013
- 11) 徐 昌教: 足底筋膜炎に対する麻杏薏甘湯加減の治療効果 漢方と診療 4(1) 52-55 2013
- 12) 中田敬吾: ガングリオンと麻杏薏甘湯 漢方の臨床 55(11) 1649-1651 2008
- 13) 喜山克彦: 手の滑膜性腱鞘の浮腫に対する麻杏薏甘湯の治療経験 第17回日本東洋医学会静岡県部会抄録 13 2005
- 14) 永井良樹: 漢方薬服用により西洋薬から離脱することができた関節リウマチの一例 漢方の臨床 60(6) 979-982 2013
- 15) 西森婦美子: 「痺症について」福岡医師漢方研究会会報 25(4) 1-25 2004
- 16) 大塚敬節: 搗薬閑話 漢方と漢薬 4(7) 792-793 1937
- 17) 龍野一雄: 新撰類聚方 105-106 雄渾社1959
- 18) 渡邊善一郎: ヒトパピローマウィルスによる尋常性疣贅「皮膚のカゼ」の漢方エキス剤治療 漢方研究 206-210 2012
- 19) 緒方玄芳: 漢方診療おぼえ書き(188) 漢方の臨床 47(2) 274-275 2000
- 20) 中村謙介: 主婦湿疹に麻杏薏甘湯 漢方の臨床 34(1) 32-34 1987
- 21) 桜井みち代 ほか: 漢方薬が奏効した脂漏性皮膚炎の5症例 日東医誌 60(2) 155-159 2009
- 22) 木村尚平 ほか: 麻杏薏甘湯が奏効した帯状疱疹神経痛の1例 痛みと漢方 15 58-60 2005
- 23) 李 晩湘: 麻杏薏甘湯による腎炎の治療 中医臨床 6(1) 48 1985
- 24) 仙頭正四郎: チック症を伴う鼻閉・不眠の症例 伝統医学 7(1) 9-11 2004
- 25) 織部和宏 ほか: 東洞先生はそうおっしゃいますが 漢方療法 17(9) 656-661 2013
- 26) 小川 勇: 喘息発作の陰陽論的考案および麻杏薏甘湯の効果 漢方診療 12(4) 27-29 1993
- 27) 玉嶋貞宏 ほか: 脳卒中後の肩、肘、手首の疼痛に漢方治療が有効であった1例 東静漢方研究室 35(5) 16-18 2012
- 28) 上田 徹: 頸髄損傷患者のリハビリテーションに漢方薬の併用が著効を示した2症例 漢方医学 36(1) 66-69 2012